



小説の未来 (9)

有限と無限

春日信彦

作品は“創作過程”の一瞬

「有限と無限」という概念は、普遍的な課題となる概念ではないかと思われませんが、私が思考する上で必ず条件づけられてしまう概念なのです。思考の中核をなす「有限と無限」は、創作過程においても重要な概念でもあります。

それでは、小説における「有限と無限」について述べてみたいと思います。小説は、料理のようなものとたとえましたが、このたとえで考えていくと説明しやすいのです。と言いますのは、小説（料理）の創作において、無限にある材料から自分が必要とする材料を探し出し、次にそれらを組み立てていくわけですが、その時点で機能している言語中枢の言語能力は、有限的なものと言えます。同様に、小説という作品が出来上がった時点では、その作品（料理）は有限的なものと言えるでしょう。

でも、おそらく、脳が記号化する認知対象物である材料は無限に存在し、記号やイメージなどを使った創作手法も無限に存在すると思われれます。だから、人間の脳が存在する限り、作品（料理）は無限に創作され続けると言えるでしょう。また、創作材料は無限にあり、具体的な創作手法も無限にあるわけですから、精神活動の結果生み出される完成作品という終着点も、無限にあるといえます。

小説の創作とは、作品という有限に向かって、無限に存在する材料の探索と組み立てを可能な限り繰り返すという“思考過程”だと思っています。また、いかなる作品も完成品という終局を迎えているように見えて、実は、無限に続く創作過程の“一瞬”のように思えます。

いかなる作家もその人なりの創作手法を持っていると思いますが、私は、私なりの創作手法を持っていると思います。でも、はっきり言って、私の創作手法を理論的に、明確に、誰にでもわかりやすく説明することは難しいと言えます。

作家にとって、創作手法は非常に重要なものなのですが、おそらく、作家自身は、読者に対し明確に分かりやすく説明できないのが現状ではないでしょうか？現実には、多くの読者が、作家の気持ちと創作手法を作品から感じ取ってもらう以外ないようなにも思われます。

条件的に成長する精神

小説は人間関係の根源となっている精神を具体的にドラマ化したものと言えますが、そこで、人間の“精神の成長”について考えてみたいと思います。

分かりやすいように子供の成長について考えてみたいと思います。成長過程にある子供の精神は、脳細胞が正常に成長すると仮定して、将来に対し無限の可能性を持っていると言えます。現実的には脳細胞の成長過程で複雑な条件が作用しますが、子供たちは、常識的に不可能と思われるような壮大な夢を描くことが許されます。

確かに、子供は、大人に向かって全身の細胞を増殖させ、徐々に成長するわけですから、将来に対し無限の可能性を持っていると言えるでしょう。また、子供たちは、家族、学校、職場、などという組織に条件づけられて成長し、社会、国家の一員として生きていきます。

でも、即座にお分かりのように、一個人の人間は、無限に生存する生物ではありません。死という終焉（しゅうえん）があるのです。人間の卵子が人間の精子を受け入れ、受精したならば、細胞分裂を繰り返し、人間として成長していきますが、それが成長し、数十年間生存したとしても、人間は必ず死に至ります。

死ぬということを有限とすれば、人間は、“有限なる物質”と言えます。一方、人間が永遠に子孫を残し続けることができると考えれば、人類は無限に存在すると言えるかもしれません。

ちょっと寄り道した話をします。宇宙は有限でしょうか？それとも、無限でしょうか？宇宙の外側は存在するのでしょうか？それとも、存在しないのでしょうか？宇宙は終焉を迎えるのでしょうか、それとも、無限に存在し続けるのでしょうか？ゼロに最も近い数字は、あるのでしょうか？また、最も遠い数字はあるのでしょうか？このような常識では回答できない質問をされると、不安になります。

私たちは、できる限り不安のない、悩みのない、平穏な心の状態で生活したいと願っています。だから、心を安定させるために、何らかの条件設定をします。

そのことに関し、身近なことで考えてみましょう。太陽は動いているのでしょうか？ほとんどの人は、地球が動いているから、太陽が動いて見えると答えるでしょう。この答えは、一般的ですから疑問はないと思われます。

では、なぜそのような答えを出すのでしょうか？それは、大半の人たちは、そのことを小学校でそのように習っているからです。また、教科書や辞典に記載されているそのような知識を常識として身につけているからです。

質問に対する多くの人たちの答えは、常識的なものがほとんどです。また、そのように答えることによって、社会の治安が維持され、生活と心も安定するのです。つまり、ほとんどの人の考えは、一般的、常識的、条件的なもので、無条件的なものではありません。言い方を変えれば、人の言動の指針となる考えは、家族、学校、職場などの生活環境から与えられた情報に基づき導き出されたものなのです。

簡単に言えば、人の考えは、条件設定された有限的なものだと言えます。また、人は、有限的知識を有することで、安心感を得ているのです。もし、ある問題に対し無限に答えがあるとすれば、悩み苦しみ不安になって生活できなくなってしまう。

私たちは、条件付けられた思考を行い、その結果を常識として共有し、円滑な日常生活を行っているのです。また、この常識があるからこそ、社会の治安と心の平穏が守られるのです。だからと言って、全人類に共通する常識があるわけではありません。

“有限と無限”を内包する小説

作品は、“無限に続く創作過程の一瞬”に過ぎないと述べましたが、創作活動は、解析された思考の集積だと言えます。そこで、日ごろよく使う“思考”について考えてみたいと思います。思考という言葉は、無意識に日常生活で使っていますが、人は、考えるときどのような道具を使って精神作業を行っているのでしょうか？

私たちは、“言葉や記号”を使って考えや気持ちを他人に発信します。ということは、考えるときにも、言葉や記号を使っていると推測できます。もちろん、言語化されていない概念やイメージの思考も存在すると推測されますが、おそらく、意識される段階での思考は、言語化されたものを思考と呼んでいるように思えます。

小説は、言語と記号の集合体です。作家は、脳内にある概念やイメージや音などを言語化し、それらを利用しながら文を作り、さらに、それらを文章へと組み立てているのです。一方、読者は、作家が作り上げた文章から“作家の思考や気持ち”を逆算するように推測することになります。だから、当然、読者が憶測した作家の考えと作家本来の考えとは必ずしも一致するとは限りません。

そのことを踏まえたうえで小説に内包される有限性と無限性について考えてみたいともいます。創作において、作家の概念は言語化されていきます。そして、脳内言語は他人が認識できる言語へ姿を変え、外部へ発信されていきます。

この発信される言語ですが、この言語は概念が記号化されたという点において有限なるものではありますが、記号が内包する意味は、無限なるものなのです。分かりやすくするために、例を挙げて説明します。

日本人であればほとんどの人が知っている“太陽”という言葉があります。人は、宇宙にある物質を記号化することによって、未知なる物質を認識していきます。この記号化は、言い換えれば、未知なる無限の要素を含む物質を有限化したことになるのです。

太陽という言葉を知くと、人は脳内に太陽をイメージできます。そして、太陽を理解できたと安心できます。物質とその運動を記号化するということは、先にも言いましたように、有限化することなのですが、“同時に”太陽という言葉は、その記号の中に無限の要素をも内包しているのです。

今仮に、太陽とはどのようなものですか？と質問された場合、人はどのように答えるでしょうか？おそらく、“生物が生存し続けるためには不可欠な光と熱を発するもの”というような常識的な答えが返ってくると思われませんが、実は、条件を設定しなければ、答えは、無限に存在するのです。

作家は、無限なる概念を言語化、記号化をするという作業を行い、有限なる文章を構築し、無限を内包する有限なる作品を読者に提供しているのです。「有限と無限」の概念は、私の創作の中核をなしているのですが、私が作り上げるフィクションは、“認識と社会の有限性と無限性”を理解していただくためのものと言っても過言ではありません。

今回は、かなり説明が難しかったのですが、ほんの少しでも、理解していただければ幸いです。